

栃木県結核・感染症発生動向調査情報

(サーベイランス)







令和4(2022)年2月(週報第5週～第8週(1/31～2/27))集計の感染症発生動向調査情報に関する解析結果は次のとおりです。

1 感染症解析情報 {2月は4週間、1月は4週間、前年同期は4週間での比較となります。}

(1)概況

ア. 2月の報告数は次のとおりです。全数(1～5類)把握疾病は、**20,780件**(1月**8,952件**)でした。定点把握疾病のうち週報疾病(インフルエンザ定点、小児科定点、眼科定点、基幹定点の週報)は**838件**(定点あたり**4.44件/週**)であり、1月の**904件**(定点あたり**4.95件/週**)と比較し、週あたり**0.90倍**とほぼ同様の水準で推移しています。

イ. 栃木県において報告が多かった主な疾病は次のとおりです。(定点把握週報疾病)

疾病名	報告数	前月との比較(週あたり比)	前年同期との比較(週あたり比)
感染性胃腸炎	607件 (週あたり平均151.75件)	 (1.03倍) 前月は591件 (週あたり平均147.75件)	 (1.74倍) *前年同月349件 (週あたり平均87.25件)
手足口病	52件 (週あたり平均13.00件)	 (0.57倍) 前月は92件 (週あたり平均23.00件)	 (5.78倍) *前年同月9件 (週あたり平均2.25件)
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	52件 (週あたり平均13.00件)	 (0.79倍) 前月は66件 (週あたり平均16.50件)	 (0.70倍) *前年同月74件 (週あたり平均18.50件)

- ① **感染性胃腸炎**は、前月に比べ報告数が1.03倍とほぼ同様の水準で推移しています。前年同期に比べると、報告数で1.74倍と大幅に高い水準で推移しています。全国的には、過去5年間の同時期と比較して、ほぼ同様の水準で推移しています。
- ② **手足口病**は、前月に比べ報告数が0.57倍とかなり低い水準で推移しています。前年同期に比べると、報告数で5.78倍と大幅に高い水準で推移しています。全国的には、過去5年間の同時期と比較して、ほぼ同様の水準で推移しています。
- ③ **A群溶血性レンサ球菌咽頭炎**は、前月に比べ報告数が0.79倍とやや低い水準で推移しています。前年同期に比べると、報告数で0.70倍とかなり低い水準で推移しています。全国的には、過去5年間の同時期と比較して、かなり低い水準で推移しています。

(2)全数(1～5類)把握疾病情報(全国)

ア. 1類、2類、3類疾病及び指定感染症

結核883件(1月1,032件)、細菌性赤痢5件(1月0件)、腸管出血性大腸菌感染症37件(1月77件)、新型コロナウイルス感染症2,077,733件(1月970,157件)の報告がありました。他の疾病の報告はありませんでした。

イ. 4類・5類(上位6疾病)

順位	疾患名	件数	前月件数
1	梅毒	739	731
2	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	86	112
3	侵襲性肺炎球菌感染症	84	98
4	レジオネラ症	63	101
5	後天性免疫不全症候群	60	75
6	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	57	61

ウ. 栃木県では次の報告がありました。(計20,780件)

結核11件、腸管出血性大腸菌感染症1件、クロイツフェルト・ヤコブ病1件、侵襲性インフルエンザ菌感染症2件、侵襲性肺炎球菌感染症1件、梅毒12件、新型コロナウイルス感染症20,752件

※本解析評価は、速報性を重視しておりますので、今後の調査などの結果に応じて、若干の変更が生じることがあります。

2 疾病の予防解説

県内で発生した感染症のうち、RSウイルス感染症、感染性胃腸炎について解説します。いずれも感染症法に基づく5類感染症定点把握疾患です。これらの感染症は、手洗いなどによる予防が有効です。日頃から、バランスの良い食事や十分な休養を心がけ、症状があるときは、早めに医療機関を受診しましょう。

RSウイルス感染症は、例年、全国の流行時期は秋から冬にかけみられていましたが、この数年で、時期が早まる傾向が報告されています。特に、2020年は新型コロナウイルス感染症の流行及び感染予防対策により全く流行が見られず、2021年に春から夏にかけ大きな流行がみられるなど、流行時期に大きな変化が起っています。本年は、まだ流行は認められていませんが、今後の動向に注意しましょう。

また、感染性胃腸炎は、全国的には過去5年間の同時期とほぼ同様の水準で推移していますが、冬季に多く発生しやすいため、引き続き予防対策を心がけましょう。

疾病名	原因と潜伏期間	症状や特徴	予防対策
RSウイルス感染症	RSウイルス 2～8日間	発熱、鼻汁などの上気道炎症状が数日続き、その後下気道炎症状が出現し、場合によっては、細気管支炎、肺炎へと進展していきます。何度も感染と発病を繰り返しますが、乳児の初感染時は、下気道症状を起こす危険性が高いです。生後1歳までに半数以上が、3歳までにほぼ100%の児がRSウイルスに1度は感染するとされています。	子どもが日常的に触れるおもちゃ、手すりなどはこまめにアルコールや塩素系の消毒剤等で消毒しましょう。流水・石鹸による手洗いやアルコール製剤による手指消毒が効果的です。症状が出たら咳エチケットを心がけ、マスクを着用しましょう。
感染性胃腸炎	ノロウイルス、ロタウイルスなど多くのウイルスや、細菌、寄生虫など ノロウイルス:1～2日間	主な症状として、激しい吐き気やおう吐、腹痛、下痢、発熱などが現れます。一般に2～3日で軽快しますが、乳幼児や高齢者などでは重症化し、脱水症状などを起こす場合もあります。治療は、ウイルス性の場合には水分補給などの対症療法が中心となります。 また、下痢等の症状消失後もウイルスの排出が1週間程度続くと言われています。細菌や寄生虫による場合は、病原体に対する特異的な治療が必要です。	普段から手洗いを徹底しましょう。ノロウイルスは、食品の中心温度85℃～90℃で90秒以上加熱をすることにより感染力がなくなります。おう吐物などの処理は、使い捨てのマスク・手袋等を着用し、しっかりとふき取り、ビニール袋に密封して捨てましょう。おう吐物などがあつた場所を次亜塩素酸ナトリウムで消毒しましょう。

(疾病の予防解説 参考) 国立感染症研究所 ホームページ <https://www.niid.go.jp/niid/ja/diseases.html>

厚生労働省 ホームページ <https://www.mhlw.go.jp/>

※予防解説は一般的なことを記載していますので、不明な点は主治医によく相談するようにしましょう。

3 その他の参考事項

国立感染症研究所の感染症発生動向警報システムにより、2月に県内で発生した警報および注意報はありませんでした。

※国立感染症研究所の感染症発生動向警報システムは、過去の週ごと・保健所ごとの届出数に基づき、届出数が特に多いとき（およそ上位1%以内）に警報が発生されるよう、疾病ごとに定点当たりの基準値が定められたものです